
怪盗からのネタばらし

ペロコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗からのネタばらし

【Nコード】

N5023C

【作者名】

ペロコ

【あらすじ】

元に戻った探偵と、怪盗の対峙…。そこで、怪盗からのあるネタばらしが行われる。（ちなみに、そのネタ、正体を暴いたものではありませんので。）怪盗から明かされる秘密。読んでいただけたら嬉しいです☆

うだるような暑い夏の夜。空には満月が輝く。現在時刻は午前0時。月光の下で、今夜も白い鳥が舞った。

常にビッグジュエルを狙う白き衣をまとった怪盗は、予告状を送るのを自らのスタンスとしていた。その予告状の奥深くには、しっかりと解読できる者でしか分らないようにして、怪盗は中継地点の場所を記していた。

今宵も、警察を相手に華麗な手腕を披露した怪盗は、ダミーを飛ばし、馴染みの熱血警部を追い払ってゆっくりとした動作で自分の羽根を広げ、夜空へ飛び立った。

目指すは、予告状に記した中継地点。

「しかし、警部も毎度毎度騙されて…。何で気づかないかねえ？

でも、今日の警備はなかなかだった…」

と発した小言は夜の闇の中に消えてゆく。

本日の中継地点は、杯戸シティビル屋上。

周囲に人の気配が無いことを確認し、音も無く降り立つ。

羽根をたたみ、クルリと返した手には今夜の獲物の宝石が。

流れるような動作で、自らの守護神でもある月へとかざす。

だが、いつものようにそこに赤い光は見当たらず、ポツリと一言漏らす。

「今日もハズレ、か…」

「何がハズレなんだ？」

「!？」

いつもなら返ってくる言葉などない。慌てて振り返ると、そこには

蒼い瞳を持つ……

「名探偵……」

「よお、久しぶりだな。……いや、この姿では“初めまして”かな？」

「……お戻りになられたのですね」

「ああ……3日前にな」

「そうですか……大きくなりました」

「……おめえ、オレを怒らせたのか？」

「滅相ありません！ そのままの意味ですよ」

「……で？ 何が“ハズレ”なんだ？」

「それはお答えできません。あ、それから、この宝石は目当てものではなかったので、名探偵からお返ししておいてもらえますか？」
と言うやいなや、ヒョイと時価数千万の宝石を投げる怪盗。
受け取る探偵はやや緊張しつつもそれをしっかり手に取る。

「それのお礼と言っては何ですが……。1つネタばらしを」

「ネタばらし？」

「はい。そのお姿と“対面”するのはもちろん初めてです。ですが、名探偵もご存知の通り、あなたのお姿は借りたこともあるぐらいいよく存じております。そして、こうして本来のあなたと“対決”するのは今夜で2度目となります」

「2度目……だと！？」

「ええ。やはりご存知なかったようですね。私は誰だったのか気になって徹底的に調べさせていただきましたしね。あの時のジョーカーはいかなる人物だったのか」

「ジョーカー？」

「まあ、調べるまでもなく翌日の新聞にはあなたのお名前に顔写真、しかも、明確な答えまで載っていましたか……」
「？」

未だ困惑している探偵の様子に、怪盗は最大のヒントを与える。

「コノカネノネハワタセナイ」

「えっ!? それって…いつだったか、時計台の事件の暗号…って、あれ、お前だったのか!？」

「はい。あの時、マスコミ各社が警察の勝利と叫ぶ中、私の本当の狙いを見抜いていたのは、名探偵、あなた1人でした。あの時計台は、私の大切な思い出のある場所。失いたくなかった…」

「…あれ、お前だったんだ…」

「あの時は本当に焦りましたよ。余りにも警部の指示が鋭いので…。ですが、あなただったんですね。あの時通風孔の中を見るように言ったのも、張っておいた幕をピンポイントで撃ったのも…」

「ああ。あの時はたまたま警部にへりに乗せてもらう約束をしててな。ついでに現場も行ってみたんだ」

「もしかして、今夜も警備の方には…」

「助言だけ、な。中森警部とは、あの時計台の時に敵意持たれちまったし。まあ、当然だけど。今日ここに来たのは、予告状にここを通ることが書いてあったから」

「さすがですね。あれはなかなか解けないようにしてあるんですが。さすが名探偵! …さて。おしゃべりはこれぐらいにして、私は帰らせていただきます」

「おー、帰れ、帰れ!」

「おや、私を捕まえないんですか?」

「コソ泥には興味ねえし…ここに来たのは、捕まえるためじゃなくて、お前が本当に来るかを知りたかったただけだしな」

「そうですか…。では、失礼します」

と言うと、怪盗は羽根を広げ西の方へ飛び去った。

一方、残された探偵は、

「それに…借りがあるしな。助けてもらった礼だよ」

と小さい姿だった頃を思い出し、お人好しの怪盗に呟いたとか。

だが、その小さな呟きを聞いたのは、
頭上に輝く満月だけ……

（後書き）

みなさま、こんにちは、ペロコです。

久しぶりに、1話完結のお話を書きたくて、それに、キッドが書きたくてこんなお話を書いてしまいました。

新一と、キッドという組み合わせ。なかなか書けないです。この元ネタは、友達です。

「新一とキッドがまた会ったらどんな風に会話するんやろうね？」という友達の一言により、考えだされたのがこのお話。いかがでしたか？

ネタⅡ時計台の事件のこと。

新一は、いちいちあの時のことを調べてないと思うんですね。とか、コナンになって完全に忘れているだろうと。ということで、怪盗さんから明かしてもらいました。見事に話をすり替えています；

こんなお話でも、評価や感想がいただけたら嬉しいです☆連載の方も、頑張りますので、これからもよろしくお願いします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5023c/>

怪盗からのネタばらし

2010年12月25日16時49分発行